

RISTEX CT ジャーナル

第1号

発行日 2010年4月13日

モスクワ地下鉄連続爆破テロ：テロ再熱の恐れ

長谷川 美沙 RISTEX 研究助手

1. はじめに

2010年3月29日、モスクワ中心部にある地下鉄2駅で朝のラッシュアワーの時間帯を狙った連続爆破テロ事件が発生した。最初の爆発は午前8時前（現地時間）ごろ、ルビャンカ駅に停車中の車両の前から2両目で発生した。ルビャンカ駅は旧ソ連国家安保委員会（KGB）、現連邦保安局（FSB）本部の最寄り駅であり、かつ、クレムリンからわずか800mと政権中枢部に隣接している。次いで約40分後、同じ路線の4駅先であるパーク・クリトゥールイ駅でも、同様に前から3両目の車両で爆発が発生した。ルビャンカ駅とパーク・クリトゥールイ駅は市内でも最も乗降客が多い主要駅として知られており、この連続爆破テロによる死者は40人、負傷者は120名以上にのぼる（4月8日時点）¹。今回のテロは当初よりカフカス系の女2人による自爆テロとの見方が有力であったが、その後の調査で、最初の自爆犯はマリヤム・シャリポワ容疑者（当時28歳）、2件目の自爆犯はジャネット・アブドラフマノワ容疑者（当時17歳）と断定された。

テロ発生時には約50万人が地下鉄を利用していたとされることから、このテロはある特定の人物を狙ったものではなく、一般市民を狙った無差別テロであった。この事実は世界を震撼させ、ロシアでテロが再熱する恐れがあることを暗示する事件となった。

本稿では、このたびの事件の歴史的・社会的背景を示した上で、このところ更なるテロが起きる懸念が増大している状況について述べ、テロ脅威削減のために、ロシアがとるべき戦略的方向性について考察する。

2. テロの歴史的・社会的背景

(1) ロシアと北カフカスの確執²

¹ “New Caucasus Unit Will Fight Terrorism”, *Moscow Times*, 2010.4.8

<http://www.themoscowtimes.com/news/article/new-caucasus-unit-will-fight-terrorism/403503.html> (2010.4.12 閲覧)

² アンナ・ポリトコフスカヤ著、「チェチェン やめられない戦争」、pp.36-40

北カフカス地方は、モスクワの百数十キロ南方にあり、多数の少数民族が暮らす地域である。1990年代には、北カフカスの一角で独立を求めるチェチェン共和国にロシアが2度にわたって武力侵攻した。ソビエト連邦末期、多くの共和国が主権を確立する中で、1991年11月、ドゥダーエフ・チェチェン共和国大統領（元ソ連空軍少将）を中心とするチェチェン民族会議は、ソビエト連邦からの独立を一方向的に宣言した。しかし、1993年になるとチェチェン共和国内部でドゥダーエフ派と反対派が対立し内戦状態に陥る。この事態に対して、かねてよりチェチェンの独立を認めていなかったロシアのエリツィン政権（当時）はチェチェンの分離独立を阻止するために反対派を支援し、1994年末にチェチェン内戦に軍事介入した（第一次チェチェン紛争）。第一次チェチェン紛争は1996年5月の「ハサヴユルト合意」により一応のピリオドを打ち、チェチェンの独立は5年後の2001年に再び検討されることとなった。翌1997年1月にはロシア連邦軍が全面撤退し、同年10月に行われた大統領選では独立派のマスハドフが選出された。ところが1999年7月、チェチェン政府の統制を離れたイスラム原理主義武装勢力が隣国ダゲスタン共和国に越境侵入した。そして同時期にモスクワなどで連続アパート爆破事件が発生し、この一連のアパート爆破テロをチェチェンの反政府武装勢力による犯行と断定したロシア政府は、「テロリスト掃討」を目的として、プーチン首相（当時）の陣頭指揮により、同年9月に2度目の軍事介入を開始した（第二次チェチェン紛争）。以来、プーチン首相（後に大統領、現在再び首相）は「対テロ掃討作戦」を展開し、武装勢力から親ロシアに転じたカディオロフ親子にチェチェンの政権を担わせた。こうして武装勢力を分断して政権側に取り込み、他の武装勢力を追い出すことで、徐々にチェチェンの治安は回復してきたとされた。この結果、2009年4月16日、約10年ぶりにチェチェンは「対テロ作戦地域」から除外されるに至った³。

（2）「黒い未亡人」：復讐心を抱く女性たち

2度に渡る紛争の舞台となったチェチェンでは、多数の犠牲者を出してきた。その数は20万人以上とも言われており、その多くは民間人であると伝えられている⁴。そして戦時下の混乱に紛れて、ロシア連邦軍による深刻な人権侵害が行われていたと言われている。人権侵害と言っても無差別の殺害や過剰な武力行使、身柄拘束中の拷問・虐待、略奪、横領など実に様々である。こうした異常事態に対して、反政府武装勢力の活動は活発化し、ロシア連邦軍との抗争はますます激しさを増していくこととなった。このような時流の中で、ロシア連邦軍による掃討や交戦により夫や息子、兄弟を失う女性も増え続けたのである。大切な家族を失った女性の中には、肉親を奪われたことに対する怒りや恨みをロシア政府に抱き、仇討ちのためにテロに身を投じる者がいると考えられている。彼女らは喪服に身を包んでいることから「黒い未亡人」と言われているが、今回の連続爆破テロ実行犯の少

安倍川 元伸著、「国際テロリズム 101 問」、pp.124-125

³ “Russia 'ends Chechnya operation'”, *BBC News*, 2009.4.16

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/8001495.stm> (2010.4.9 閲覧)

⁴ 安倍川 元伸著、「国際テロリズム 101 問」、前掲

なくとも1人はこの「黒い未亡人」であったとされる⁵。報道によれば、2件目の爆発を起こしたアブドラフマノフ容疑者は、2009年12月31日にダゲスタン共和国で警察官に射殺されたイスラム武装勢力指導者の1人、ウマラト・マゴメドフの妻だったと言う⁶。もう一人の自爆犯であるシャリポフ容疑者はダゲスタン共和国出身であり、同共和国で活動する武装勢力のリーダーの妻だったと言われている⁷。

ここに反政府武装勢力とロシア政府の戦いにおけるひとつの特徴が見て取れる。女性が直接テロ攻撃に荷担するというやり方は、国際テロ組織「アルカイダ」のような宗教的イデオロギーに基づく戦いとは異なり、政治的な動機に基づく戦いであると指摘されている。すなわち戦いには誰でも参加することが可能であり、男性であろうと女性であろうとそのことは全く無関係なのである⁸。

(3) 主なテロ事件⁹ (1999年以降)

以下に独立派武装勢力によるとみなされる主なテロ事件の一覧を記載する。

- ・数字①～⑦は【図1】北カスカス地方の地図とリンク
- ・「*」は「黒い未亡人」が関与したとされる事件

1999年9月	モスクワなどの3都市で連続アパート爆破事件	300人以上死亡	
2002年10月	モスクワ中心部にあるドプロフカ劇場占拠事件	観客約130人死亡、武装グループ41人射殺	*
2002年12月	チェチェン共和国の首都グロズヌイで庁舎が爆発	72人死亡	①
2003年5月	チェチェン共和国北西部の庁舎付近で爆発	60人以上死亡	②

⁵ “Attacks bear hallmarks of Chechen 'Black Widows”, *CNN News*, 2010.3.29
<http://edition.cnn.com/2010/WORLD/europe/03/29/russia.moscow.suicide.bombers/index.html> (2010.4.9 閲覧)

⁶ “Teenage bride of Islamist militant named as 'Black Widow' suicide bomber” *Times*, 2010.4.3
<http://www.timesonline.co.uk/tol/news/world/europe/article7085541.ece> (2010.4.9 閲覧)

⁷ “Russia identifies 2nd Moscow subway bomber” *CNN News*, 2010.4.2
<http://edition.cnn.com/2010/WORLD/europe/04/06/moscow.subway.bombings/index.html?iref=allsearch> (2010.4.9 閲覧)

⁸ “Attacks bear hallmarks of Chechen 'Black Widows”, *CNN News*, 2010.3.29, 前掲

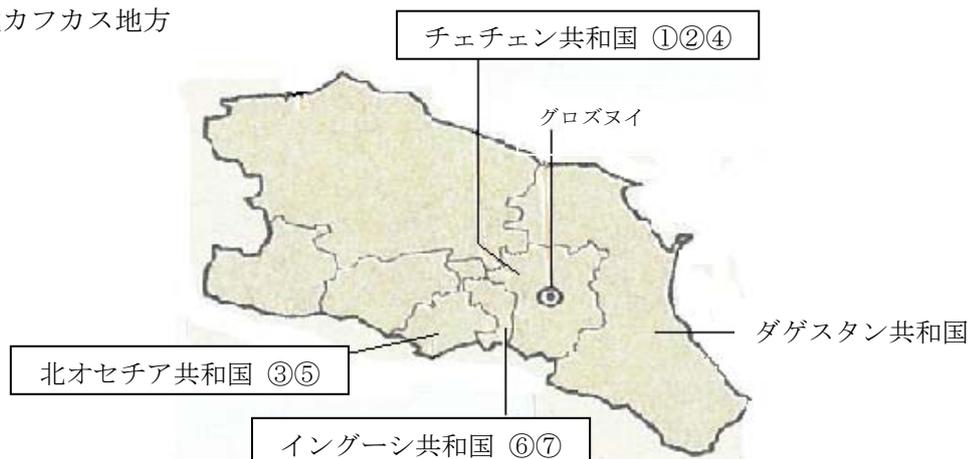
⁹ 朝日新聞・時時刻刻、2010.3.30 pp.2

“Timeline: Russia”, *BBC News*, 2010.3.31

http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/country_profiles/1113655.stm (2010.4.9 閲覧)

2003年7月	モスクワの野外コンサート会場で爆発 「黒い未亡人」2人による犯行	15人以上死亡	*
2003年8月	北オセチア共和国・モズドクの軍病院で爆発	約50人が死亡	③
2004年2月	モスクワ地下鉄パベレツカヤ駅で爆発 (朝の通勤時間を狙った犯行)	41人が死亡	
2004年5月	カディロフ・チェチェン共和国大統領暗殺事件 (グロズヌイで開催された対独戦勝記念式典中の爆弾テロ)	カディロフ大統領・ 政府高官ら30人以上死亡	④
2004年8月	モスクワ発の旅客機2機がほぼ同時に爆破され墜落	90人死亡	*
2004年8月	モスクワ地下鉄リシスカヤ駅付近爆破	10人以上死亡	*
2004年9月	北オセチア共和国・ベスランの学校占拠事件	330人以上死亡(半数以上は児童)	⑤ *
2009年6月	イングーシ大統領暗殺未遂事件 (大統領の車列に爆弾を搭載した車が突入し爆発)	イングーシ大統領重傷	⑥
2009年8月	イングーシ共和国・ナズランの警察で自爆テロ	20人死亡	⑦
2009年11月	モスクワ発サンクトペテルブルク行きの特急列車「ネフスキー急行」が爆発・脱線	28人が死亡、約100人が負傷	

【図1】北カフカス地方



3. 犯行声明?

報道によると、イスラム系武装組織「カフカス首長国」(後述)の指導者ドク・ウマロフ司令官がインターネットを通じて犯行声明を掲載した。ビデオ声明はテロが起きた3月29

日に撮影されたとみられている。テロの動機としては、「2月に連邦保安局が無実のチェチェン住民を虐殺したことへの報復」と説明しており、更なるテロ攻撃を予告するメッセージも含まれていた。ただし、この声明の信憑性は明らかになっていない¹⁰。

いずれにせよ、今回の連続爆破テロは、対テロ強硬路線を貫く政権への報復との見方が優勢である。1回目の爆発は連邦保安局（FSB）本部が目の前にあるルビャンカ駅で起きており、2回目の爆発は、警察組織を管轄する内務省本部があるオクチャープリスカヤ駅の隣駅で起きたことから、実際の標的はオクチャープリスカヤ駅であったのではないかとの見方もあるようだ¹¹。今となっては真の標的がどこであったのか知るよしもないが、政府の権威失墜を狙ったロシア権力中枢に対する挑戦状であったことは間違いないように思える。

【カフカス首長国（Caucasus Emirate）】¹²

チェチェン独立派武装勢力出身のドク・ウマロフ司令官が率いるイスラム過激派組織。2007年10月、ウマロフ司令官により創設が宣言された。現在は北カフカス地方にまたがる地域にイスラム帝国の建設を目指して活動している。なお、ウマロフ司令官は多数のテロの首謀者とみられており、2009年11月のモスクワ発サンクトペテルブルク行きの特急列車爆発事件でも犯行声明を出している。

4. テロ拡散の懸念

2009年4月16日、ロシア政府は第二次チェチェン紛争以降にチェチェン共和国で敷かれていた「対テロ作戦地域」からの解除を決定した。この措置はイスラム系住民が大半を占めるチェチェンを支配していた独立派武装勢力がロシア連邦軍の作戦で壊滅し、地域の安定は増したとの判断からであった。しかし、チェチェンの治安回復はカディオロフ大統領による強権的支配によるものとも言われており、恐怖で住民を抑えつけようとしているだけとの非難も出ている。一方では、東隣のダゲスタン共和国、西隣のイングーシ共和国でテロや爆発が頻発し、火種は周辺に拡散したとの批判もある¹³。

実際、モスクワ地下鉄連続爆破テロからわずか2日後の3月31日、北カフカス地方のダゲスタン共和国・キズリャルで、2件の連続した自爆攻撃が発生し、警察官ら9人を含む12人が死亡する事件が起きた。最初の攻撃は、内務省やテロ対策を担当する連邦保安局が入る建物の近くで発生した。警官が検問で車を停止させようとした際に、車の運転席にい

¹⁰ “Chechen rebel says he ordered Moscow Metro attacks” BBC News, 2010.3.31
<http://news.bbc.co.uk/2/hi/8597792.stm> (2010.4.9 閲覧)

¹¹ 「クローズアップ2010：モスクワ連続爆破テロ 政府治安機関、標的」、毎日新聞
<http://mainichi.jp/select/opinion/closeup/news/20100330ddn003030021000c.html>
(2010.4.9 閲覧)

¹² “Profile: 'Caucasus emir' Doku Umarov”, *BBC News*, 2010.4.1
<http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/8089996.stm> (2010.4.9 閲覧)

¹³ “Russia 'ends Chechnya operation'“, *BBC News*, 2009.4.16, 前掲

た犯人が自爆したという。2回目の攻撃は、最初の攻撃の20分後、警官の制服を着た男が、爆発現場を調べていた警官らに近づき自爆したという。ダゲスタン共和国内務省の説明によると、最初の爆発においてはTNT火薬換算で200キロ相当の爆発物が車に積載されていたとされる¹⁴。

さらに4月5日の朝、今度はイングーシ共和国・カラブラクの警察署近くで自爆テロがあり警官2人が死亡する事件が起こった。報道によると、警察に入ろうとした不審者を警官が制止したところ突然自爆したという。約30分後には付近で車両が爆発したが、この爆発による犠牲者はいないとされる¹⁵。

捜査当局はこれらの事件がモスクワ連続爆破テロと同じグループによる犯行の可能性もあるとして、関連性を調べている。

5. おわりに：テロ再熟を防ぐために

今回取り上げたモスクワの連続爆破テロは地下鉄という公共交通機関がターゲットとなった無差別テロであった。モスクワ市民の主な通勤手段であり、1日に700万人が利用されている地下鉄でのテロ攻撃はロシアだけでなく国際社会においても大きな衝撃を与えることとなった。しかも、ロシアの政権中枢部に隣接する地域でテロ攻撃が実行されたのであるからなおさらである。このことは北カフカス地方一帯に拡大するテロ集団が今もなおロシアの心臓部でテロを実行するだけの十分な力を有することを示し、表面上は弱体化したかのように見えた独立派武装勢力は、依然として脅威を及ぼしている実態を裏付けたと言えよう。

ロシア政府が推進するテロ根絶への取り組みとは裏腹に、今回のようなテロが繰り返される背景には、北カフカス地方での治安悪化、経済停滞、失業、貧困などからくる不満が、ロシア政府に対する反発へと駆り立てていると言われている。その上、チェチェンでの二度に渡る紛争を通じて蔓延した汚職や横領、チェチェンの権威者たちのあいだにはびこる拝金主義的な思想も反政府勢力だけでなく市民の反発を増幅していると言われている。こうした政府・社会に対する不満分子を過激派勢力が吸い上げ、テロ実行犯に育て上げているとの考えもある¹⁶。

その典型的な例が「黒い未亡人」といえよう。肉親を奪われたという深い憎悪に付け込み、元々は過激な思想を持っていなかった女性までも自爆テロ犯へと導いていると考えられている。このような憎悪と報復を再生産する構図があるかぎりテロの根絶は容易ではな

¹⁴ “Suicide Bombers Kill 12 in Dagestan” *Moscow times*, 2010.3.31

<http://www.themoscowtimes.com/news/article/suicide-bombers-kill-12-in-dagestan/402958.html> (2010.4.9 閲覧)

¹⁵ “Suicide Bomber Kills 2 Police Officers in Ingushetia” *Moscow times*, 2010.4.5

<http://www.themoscowtimes.com/news/article/suicide-bomber-kills-2-police-officers-in-ingushetia/403265.html> (2010.4.9 閲覧)

¹⁶ 「クローズアップ 2010：モスクワ連続爆破テロ 政府治安機関、標的」、毎日新聞、前掲

い。ロシア政府は一連のテロ攻撃を受けて「犯行組織を壊滅させる」とテロ制圧への強い意志を示しているが、力で力を押さえようとしても、過去の歴史を見る限り、テロ脅威削減のための根本的な答えは見えてこないようにも思える。

それよりもむしろ対立の本質に目を向ける必要があるのではないか。カフカスの治安対策、経済の底上げ、失業対策等を図り、透明性のある政権運営により市民の信頼回復を目指し、そして武力ではなく北カフカス地方の少数民族との対話を通して和平の道を探る努力が必要であるように思われる。

国内外における主要な会議・展示会

(注：弊センター主催以外の会議に関するお問い合わせ・お申し込みは、直接先方をお願いいたします。)

会議名：**The 2010 Biosecurity Conference**

会期：2010年5月5-6日

会場：McCormick Place（米イリノイ州シカゴ）

主催：Biotechnology Industry Organization

概要：バイオサイエンス、公衆衛生、気候変動、食料問題などバイオセキュリティに関する国際会議。元米国副大統領であるアル・ゴア氏による講演も予定されている。

ウェブサイト：<http://convention.bio.org/biosecurity/>

会議名：**3rd Sample Prep '10 - Sample Preparation for Virus, Toxin & Pathogen Detection**

会期：2010年5月6-7日

会場：Sheraton Baltimore City Center Hotel（米メリーランド州ボルチモア）

主催：Knowledge Foundation

概要：ウイルス、毒物、病原体の最新鋭検出技術につき発表・展示が行われる。

ウェブサイト：http://www.knowledgefoundation.com/viewevents.php?event_id=215&act=evt

会議名：**Cyber Defence**

会期：2010年5月17-18日

会場：Swissotel（エストニア・タリン）

主催：SMi Group

概要：サイバーセキュリティに関する国際会議

ウェブサイト：<http://www.smi-online.co.uk/events/overview.asp?is=1&ref=3242>

会議名：**The 10th International Symposium on Protection against Chemical and Biological Warfare Agents**

会期：2010年6月8-11日

会場：Kistamässan（スウェーデン・ストックホルム郊外）

主催：スウェーデン外務省、防衛研究局、ほか

概要：生物化学兵器テロ対策の現状と課題、対策に資する研究開発などに関する大規模な国際シンポジウム。CB兵器対策技術展示会併設。

ウェブサイト：<http://www.cbwsymp.foi.se/>

会議名：**Biodetection Technologies 2010**

会期：2010年6月17-18日

会場：Sheraton National Hotel（米バージニア州アーリントン）

主催：Knowledge Foundation

概要：バイオディフェンス分野における最新の探知技術、R&Dなどに関して議論予定。

ウェブサイト：http://www.knowledgefoundation.com/viewevents.php?event_id=216&act=evt

.....

RISTEX CT ジャーナル 第1号

発行人：(独) 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

古川勝久 野呂尚子 友次晋介 長谷川美沙

発行日：2010年4月13日

〒102-0084 東京都千代田区二番町3 麹町スクエア5階

Tel: 03-5214-0134 Fax: 03-5214-0140

e-mail: ct-seminar@ristex.jst.go.jp

HP: <http://www.ristex.jp/index.html>

※ 本ジャーナルから引用される場合には、引用元を明記の上、ご利用ください。

※ H22年度より「RISTEX CT Newsletter」から「RISTEX CT ジャーナル」へと名称変更しました。